



Messidor Ensemble

メシドール・アンサンブル演奏会

2011年11月13日(日)

トイスラー記念ホール

メシドール・アンサンブル演奏会

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト (1756-91)

クラリネット五重奏曲 イ長調 K. 581

- 第1楽章 *Allegretto*
- 第2楽章 *Larghetto*
- 第3楽章 *Menuetto*
- 第4楽章 *Allegretto con Variazioni*

————— 休憩 (10 分間) —————

モーリス・ラヴェル (1875-1937)

弦楽四重奏曲 ヘ長調

- 第1楽章 *Allegro moderato - Très doux*
- 第2楽章 *Assez vif - Très rythmé*
- 第3楽章 *Très lent*
- 第4楽章 *Vif et agité*

カミーユ・サンサーンス (1835-1921)

トランペット・ピアノ・弦楽器のための 七重奏曲 Op. 65

- 第1楽章 *Allegro moderato*
- 第2楽章 *Tempo di minuetto: Moderato*
- 第3楽章 *Andante*
- 第4楽章 *Allegro ma non troppo*

クラリネット：金内 智恵
トランペット：朝倉 巧
ピアノ：富田 実里
ヴァイオリン：宇野 格／孫 尚卿
ヴィオラ：林 俊夫
チェロ：坂本 謙太郎
コントラバス：島田 奈央

2011 年 11 月 13 日(日) 14 時 00 分 開演

トイスラー記念ホール

企画協力：上野まき子（聖路加国際病院）

ある録音テープに残された会話
～曲目解説に代えて～

・・・ガヤガヤ・・・

A：ラヴェルとサンサーンスかあ。フランスの曲ってよく分からないんですよ。キラキラしてるのは良いんだけど、フワフワと捉えどころがなく、サラサラ流れて行っちゃう感じというか、向こうから手を差し伸べてくれないというか…。

B：分からんでもない。“ドイツもの”と比べると、個々の曲も音楽史も捉えにくいよね。理由は色々あるけど、我々が馴れていないっていうのは大きいかな。“フランスもの”を聴く機会って少ないから。

馴染み薄いフランス音楽

A：オーケストラのコンサートでも少ないですね。なんでかしら？

B：曲がないんだよ。例えば交響曲なら、メジャーなのはベルリオーズの「幻想」とサンサーンスの「オルガン付」くらい。フランスでは室内楽・協奏曲も含めて器楽が軽視されてきたせいだろうね。

A：それじゃあ、コンサート出来ないじゃないですか。

B：そうだよ。器楽のコンサートを開こうなんていうのはドイツの発想。フランスではオペラやバレエが音楽界の中心なんだ。その伝統は今でも続いている。ドイツ語圏の有名オーケって即座にいくつも挙げられるけど、フランスでは難しいでしょ？

A：たしかに。日本ではオペラやバレエを聴く機会は少ないし、オーケス

トラのコンサートでも抜粋とか組曲を取り上げるのがやっと。だから、フランス音楽には馴染みがない、と。

B：器楽曲や歌曲って作曲家が一人で作るから、その人の思想を反映しやすいし、人生のエピソードと絡めて語れるじゃない。オペラやバレエはそうは行かない。

A：誰かの依頼で、台本に沿って作曲するんですもんね。だからフランスの作曲家の人生は音楽の授業で話題にならないんですね。

フランスには音楽がなかった

B：それに輪をかけているのが二つ目の理由。フランス音楽なんてものは存在しなかったということ。映画『アマデウス』は知ってるでしょ？

A：サリエリ(1750-1825)がモーツァルトを暗殺する話ですね？

B：うん。それまでのウィーン音楽界は、そのサリエリみたいなイタリア人出稼ぎ音楽家が牛耳っていたんだ。そこにモーツァルトが現れ、ドイツ語のオペラを作曲する。それに続くベートーヴェン(1770-1827)が音楽にメッセージを込めるようになった。この辺りからドイツ民族は独自の音楽を確立し始めたんだ。

A：フランスは違った？

B：全然。20世紀になるまで音楽の本場はイタリアだと思い続けてきたんじゃないかな。ローマ大賞っていうフランス政府主催のコンクールがあったんだけど、その優勝賞品

はローマ留学の権利だった。

A：本場イタリアとは違うフランス独自の音楽を作ろうって感じはしないですねえ。自国文化に誇りを持つ国だから、民族意識が高いのかと思ったら…。

B：民族意識は必要なかったんだよ。ルイ 13 世（位 1610-1643）の時代には既に中央集権体制が出来上がっていたからね。ドイツ人が音楽や哲学に民族のアイデンティティを求めたのは、ドイツが 1871 年まで政治的に統一されていなかったからこそじゃないかな。

粹なゲリラ活動

A：はあ…。ところで、さっきのローマ大賞ですけど、サンサーンスやラヴェルは当然優勝者ですよ？

B：いや。二人とも何回か挑戦したけど勝ったことはない。今では完全に忘れられた作曲家に負けたんだ。

A：ええ！？

B：これがフランス音楽を分かりにくくしている理由の三つ目、権威主義だ。フランスは中央集権国家だったが故に、音楽・美術・言葉まで国家の統制が強かった。お上が「模範」を示したんだね。

A：でもサンサーンスやラヴェルは従わなかった？

B：うん。ドビュッシー(1862-1918)やフォーレ(1845-1925)もね。彼らは権威に反発したゲリラみたいなもの。でも、後世に残っている曲、今我々が“フランスもの”と思っている曲はゲリラの作品ばかりだ。

A：美術の世界の印象派と同じですね。

ところで、その人たちの音楽って、オペラよりピアノ曲や室内楽のイメージが強いんですけど…。

B：オペラ座は国のものだから、ゲリラには縁遠い。大曲と言えばバレエ団に頼まれる曲くらい。室内楽は仲間内で演奏会を開けるから、ゲリラにも取り組みやすかったのかな。

A：それとフランス音楽の分かりにくさは関係あるんですか？

B：仲間内の会話には、独特の言葉や表現があるじゃない？

A：ぎろっぽんでぶしゃぶしゃ？

B：そう、そういうの。その意味をいちいち説明するのは野暮。仲間にしかならない音楽こそが粹だったんじゃないかな。

A：向こうから手を差し伸べてくれない感じがするのはそのせいですね。

B：民族のアイデンティティを異民族に分かる様に理路整然と主張してくる“ドイツもの”とは根本的に違うよね。

フランス音楽の楽しみ方

A：じゃあ、パリジェンヌでない私はフランスの曲を楽しめない？

B：それは勿体無い。モーツァルトを手がかりにしたらどうかな。ベートーヴェン以降の“ドイツもの”と違って、モーツァルトはあっけらかんと軽いじゃない？これはフレンチ・ゲリラの目指したところと重なる。モーツァルトの音楽を受け継いだのはドイツではなくフランスの作曲家だったんだね。

A：ああ、だからモーツァルトとフランスの作曲家って組み合わせられる

ことが多いんですね。

B：…と僕は思う。“ドイツもの”に馴れていると、つい思想とか意味を探したくなるけど、モーツァルトもっと素直に聴くじゃない？

A：雰囲気とノリですね。私は勝手に物語を想像しながら聴いたりしますよ。言い寄る男、もじもじする女、そこに父親が「こらっ」とか。

B：もじもじ…良いね。あ、いや、モーツァルトでもフランスものでもそういうイメージは大切だよな。

A：ダンスの曲なら踊っちゃうとか？

B：それもあり。そういえば今日のサンサーンスの七重奏曲はバロック舞曲を模した曲だよ。踊る？

A：流石にここでは…。他には？

B：もっと素直に色彩の変化を感覚的に楽しむのもお奨め。モネやルノアールの絵のようにね。

A：そっか。それで良いなら日本人もフランス音楽も楽しめますね。印象派の絵は大人気なんだから。

異文化の影響

B：印象派と言えば、色彩やタッチ以外に画題も奇抜だったんだよ。同時代の都市の住民を描くというのはそれ以前にはなかった。

A：そうそう、パリの街で見たものを描いたんですよ。

B：パリは刺激に溢れていたからね。19 世紀後半に世界万博が開かれるようになったんだけど、この半世紀

でパリは 5 回も会場になっている。ロンドン、ウィーンは 1 回ずつなのにだよ。通信も写真も普及していなかった時代だから、万博は異文化に間近に接する重要な機会だった。

A：居ながらにして世界に接するのはパリの人々の特権だったんですね。日本も万博に参加したんですか？

B：1867 年以降ね。日本が出展した浮世絵が西洋美術に大きな影響を与えたのは有名な話だよな。

A：ジャポニズムですね。音楽にも？

B：多分。今日のラヴェルの第二楽章の中間部とか、第三楽章の冒頭のメロディは、西洋の伝統からは絶対に生まれないと思うんだけど…。

A：けど？

B：万博では芸妓さんがお茶のお手前を披露したらしいから、雅楽や御囃子も実演された可能性はあるよね。けど証拠はない。

A：でも、ラヴェルに日本の影響があるなんて考えると嬉しいですね。お蔭で楽しめそうです。予習お疲れ様でした。

B：じゃあ、演奏会の後ざぎんでパンションでも…。

・・・チリンチリン・・・

A：あ、開演のベル。おしゃべりはまた後ですね。それと、今夜は両親と食事するんですよ。

B：くっ…。「もじもじ」じゃなくて「こらっ」の方か…。

以上は演奏記録用に設置された録音テープに残された客席の会話を文書化したものです。声の主は不明であり、従って、内容に関して音楽学的見地からの真偽は確認されておりません。

メシドール・アンサンブル

「メシドール」とはフランス革命暦にある月の名前の一つで、現在の6月19日から7月18日に相当。初回の演奏会がこの時期だったことが団体名の由来になっている。以来この時期の演奏会開催が多いが、語感の爽やかさとは裏腹に、日本では梅雨に当たるのが悩みの種。

演奏会のたびに「いつか演奏したいと思っていた曲」を携えた有志が集う緩やかな集団を標榜している。楽器編成・メンバーは毎回変わるため、これまでの出演者は社会人・学生・主婦・職業音楽家まで38名にものぼる。

これまでの演奏会

第1回（2002年7月13日 於：新宿文化センター 小ホール）

メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲 第1番 二短調 Op. 49（フルート版）

ブラームス：クラリネット五重奏曲 口短調 Op. 115

第2回（2003年7月6日 於：幕張ベイタウンコア 音楽ホール）

ハイドン：弦楽四重奏曲 二短調「五度」 Op. 76-2

ビゼー／シンプソン：フルート・チェロ・ピアノのためのカルメン幻想曲

ドヴォルジャーク：弦楽四重奏曲 ヘ長調「アメリカ」 Op. 96

第3回（2004年2月15日 於：新宿文化センター 小ホール）

モーツァルト：フルート四重奏曲 第1番 二長調 K. 285／オーボエ四重奏曲 ヘ長調 K. 370

アダージョとロンド ハ短調 K. 617／ピアノ四重奏曲 第1番 ト短調 K. 478

第4回（2004年11月20日 於：ティアラこうとう 小ホール）

メンデルスゾーン：弦楽四重奏曲 第1番 変ホ長調 Op. 12

キュフナー（伝ウェーバー）：クラリネット五重奏のための 序奏、主題と変奏

シューベルト：ピアノ五重奏曲 イ長調「罇」 Op. 114

第5回（2005年7月10日 於：ティアラこうとう 小ホール）

ヴォルフ：イタリアのセレナーデ ト長調

モーツァルト／ヴェント：フルート四重奏のための『魔笛』より抜粋

チャイコフスキー：弦楽四重奏曲 第1番 二長調 Op. 11

房音くらぶ 音楽祭（2005年8月20日 於：南総文化ホール 小ホール）

モーツァルト：弦楽五重奏曲 第4番 ト短調 K. 516 より第1楽章

第6回（2006年4月30日 於：ティアラこうとう 小ホール）

モーツァルト／ロットラー：木管五重奏曲 ハ短調（弦楽五重奏曲 第2番 K. 406 の編曲版）

ベートーヴェン：七重奏曲 変ホ長調 Op. 20

クリスマス・コンサート（2006年12月17日 於：西千葉 カフェ・エラブル）

モーツァルト：フルート四重奏曲 第1番 二長調 K. 285

ヴィヴァルディ：『四季』より「冬」 他

第7回 (2007年5月13日 於：ティアラことう 小ホール)

ベートーヴェン：アダージョとロンド（六重奏曲 変ホ長調 Op. 81b より）

ボロディン：弦楽四重奏曲 第2番 二長調

モーツァルト：ディヴェルティメント 第17番 二長調 K. 334

第8回 (2008年6月29日 於：ティアラことう 小ホール)

バッハ：管弦楽組曲 第2番 口短調 BWV1067

シューベルト：八重奏曲 ヘ長調 D. 803

美浜音楽祭 (2009年3月21日 於：幕張ベイタウンコア 音楽ホール)

メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲 第1番 二短調 Op. 49（フルート版）

第9回 (2009年6月21日 於：ティアラことう 小ホール)

シェーンベルク：浄夜（弦楽六重奏版）Op. 4

ブラームス：弦楽六重奏曲 第1番 変口長調 Op. 18

第10回 (2009年11月22日 於：ティアラことう 小ホール)

モーツァルト：フルート四重奏曲 第1番 二長調 K. 285

プーランク：ピアノと管楽器のための六重奏曲

チャイコフスキー：弦楽六重奏曲 二短調 Op. 70「フィレンツェの思い出」

2010年霧降の森ジョイントコンサート (2010年6月13日 於：日光フィンチホール)

モーツァルト：フルート四重奏曲 第1番 二長調 K. 285 より第1楽章

ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第7番くらすモフスキー第1番 > Op. 59-1 より抜粋

バッハ：管弦楽組曲 第二番 口短調 BWV1067 より“Badinerie”

第11回 (2010年7月3日 於：ティアラことう 小ホール)

ベートーヴェン：弦楽四重奏曲第7番くらすモフスキー第1番 > Op. 59-1

ラインベルガー：九重奏曲 変ホ長調 Op. 139

幕張ベイタウンコーラスの集い (2010年10月31日 於：幕張ベイタウンコア 音楽ホール)

モーツァルト／ヴェント：フルート四重奏のための『フィガロの結婚』より抜粋

第12回 (2010年12月12日 於：ティアラことう 小ホール)

モーツァルト：フルート四重奏曲 第4番 イ長調 K. 298

シューベルト：弦楽四重奏曲 第14番 二短調 「死と乙女」 D. 810

ベートーヴェン：クラリネット三重奏曲 変口長調 「街の歌」 Op. 11

シュトラウス／シェーンベルク：皇帝円舞曲 Op. 437（七重奏版）



メシドール・アンサンブルの公式ウェブサイト

<http://artist.musicinfo.co.jp/~messidor/>

出演者の詳細なプロフィール、今後の活動予定、
これまでの録音・プログラム等を公開しています



出演者の横顔

クラリネット：金内 智恵

10歳でクラリネットを始める。上智大学管弦楽団入部早々に常任指揮者汐澤安彦氏に見出され、長きに渡って首席奏者を務め、卒業演奏会ではウェーバーの協奏曲を好演。当団には第1回以来断続的に出演し、その間に2度の出産を経験。育児・仕事・音楽活動を調和させる少子高齢化時代の模範的演奏者。

トランペット：朝倉 巧

小学校でトランペットをはじめ、井上雄二氏、築地徹氏に師事。“いつか演奏したいと思って”いた”サンサーンスの七重奏曲につられ、江東オペラ管弦楽団にて当団主宰者に捕獲される。平日は建設会社の音環境研究者。工学博士。

ピアノ：富田実里

国立音楽大学大学器楽学科ピアノ専攻卒業。第9回日本クラシック音楽コンクール全国大会審査員特別賞受賞。また同大国内外研修奨学生としてウィーンに留学。サントリーホール20周年記念公演デビューコンサート〈レインボウ21〉、第77回読売新聞社主催新人演奏会等多数の演奏会に出演。近頃は新国立劇場バレエ団や日本バレエ協会でもリハーサルピアニストを務める一方、指揮活動にも積極的。ピアノをローランド・バティック、草野明子、米田ゆり、木下まさみ、指揮を堤俊作、小澤征爾、湯浅勇治、三ツ石潤司の各氏に師事。江東オペラ筆頭副指揮者。

第一ヴァイオリン：宇野 格

4歳よりヴァイオリンを始め、高校、大学、職場とそれぞれの所属先でオーケストラに属し、コンサートマスターを務める。聴いた曲はジャンルを問わず即座にヴァイオリンで演奏できるという特殊能力を持ち、当団演奏旅行中は朝のラジオ体操の伴奏を担当する。

第二ヴァイオリン：孫 尚卿

ピアノを柳桂子氏、ヴァイオリンを上月恵氏・金田幸男氏に師事。早稲田大学交響楽団で第二ヴァイオリン首席奏者を務める。学生時代に当団主宰者の職場でアルバイト勤務。その働きぶりを踏まえた「君は研究者よりも営業向き」といういい加減な助言を真に受けて、セールスエンジニアとして計測器メーカーに就職。今のところ生き生きと働いているようなので、主宰者も一安心である。

ヴィオラ：林 俊夫

5才よりヴァイオリンを始め、大阪大学交響楽団、大阪モーツァルトアンサンブル、東京ムジックフロー、アンサンブル70sなどでコンサートマスターを歴任。30代半ばよりヴィオラに取り組み、現在は林徹也氏（元シュトゥットガルト室内楽団首席奏者）に師事。建材の営業のため全国を飛び回る傍ら、月何回かの演奏会をこなす。

チェロ：坂本 謙太郎

13歳からコントラバスを始め、15歳でチェロに転向。上智大学管弦楽団、江東オペラ管弦楽団等で首席奏者を務める。菅野博文氏（昭和音大教授）、フランツ・バルトロメイ氏（ウィーンフィル首席奏者）らに師事。当団を主宰する傍ら、経営コンサルティング会社に勤務している。

コントラバス：島田 奈央

中学校でコントラバスを始め、高校の管弦学部では部長として天下をとる。大学のオーケストラに入団するも、一度知った天下の味を忘れられず退部し、十代のうちから社会人オーケストラに参加。江東オペラ管弦楽団等多数の団体で首席奏者を務める。コントラバス奏者の常として、ジプシーのように様々な音楽団体を旅しているため、東京の音楽界での顔はやたらに広い。

当ページの内容は若干の誇張と多分な言葉遊びを含んでいます。